

## 五巻本『庸言知旨』校注（4）

竹越 孝

### <はしがき>

筆者はこれまで、清代の満漢合璧教材の一つである『庸言知旨』の五巻本鈔本を対象として、以下の校注稿を『神戸外大論叢』誌に掲載してきた。

「五巻本『庸言知旨』校注（1）」、『神戸外大論叢』第72巻，61-100頁，  
2020年4月。

「五巻本『庸言知旨』校注（2）」、『神戸外大論叢』第72巻，101-123頁，  
2020年4月。

「五巻本『庸言知旨』校注（3）」、『神戸外大論叢』第73巻第3号，67-120  
頁，2021年4月。

本来はこのまま『神戸外大論叢』で連載を続けるつもりだったが、同誌が2020年度より半年に一回の刊行から年に一回の刊行へと変更されたことや、掲載原稿に枚数制限が設けられている（第1回と第2回が同一号に掲載されているのもその理由による）ことなどもあって、本連載にとってメリットのある媒体とは言えなくなったので、第4回より本『KOTONOHA』誌に乗り換えて連載を継続することにした。これまでの3回分は神戸市外国語大学のリポジトリからダウンロードすることが可能である。連載の途中で掲載誌を変更するのは異例のことであり、本来避けるべきであるが、利用しやすい形のテキストをなるべく早く提供したいとの思いから決断したことであり、謹んでご寛恕を乞いたい。

以下では、まず連載開始時の前言と凡例を再度掲げるので参照されたい。これまでの3回で、五巻本鈔本における第一巻、四章分が終了したところなので、第4回は第二巻の目録（各条の最初のフレーズを収録する）から始め、以降は1回に一章のペースで終了まで漕ぎつけたいと希望している。

## 前 言

本稿は、清代に成立した満漢合璧（並置対訳）形式の満洲語教材『庸言知旨』（an i gisun de amtan be sara bithe）を対象として、現存の諸本を校合するとともに、満洲文字のローマ字転写に逐語訳を付し、あわせて漢字の部分の翻字したテキストである。

『庸言知旨』は清の宗室宜興（ihing；字は桂圃、1747-1809）の著、序文末尾の記載によれば、その成立は嘉慶7年（1802）である。書名が示す通り、日常の言葉（庸言；an i gisun）の中に満洲旗人としての生き方の要諦（旨；amtan）を知るという趣向の書物であり、基本的には独白体で各種の人生訓や処世訓が記されている。

これまで、本書に関する研究は主に全二巻の刊本に基づいて進められてきた。現存する刊本のほとんどは、嘉慶24年（1819）に査清阿（jacingga）が刊刻したものを民国年間に歴史学者謝国楨（1901-1982）が印行させたテキストであると考えられる<sup>1</sup>。同本に基づき、日本では寺村政男（1994）及び同（2009-2012）がその一部についてローマ字転写と訳注を発表したほか、中国において近時刊行された王磊・劉雲（2018）では、北京大学図書館蔵刊本の影印をも含む形で全書の転写・翻刻を発表している。

このたび校注を公にするのは、刊本よりも原初の姿を伝えると考えられる五巻の鈔本である。同本は大阪大学総合図書館蔵（渡部薫太郎氏旧蔵本、蔵書番号 Mn-390-16）、五巻五冊、冊大 23.8×16.5cm。毎半葉 10 行の罫紙に満漢各 5 行を墨書し、半葉の匡郭は 18.5×14.3cm。版心は白口、上黒魚尾、魚尾の上に「庸言知旨」、下に巻数（漢字）と章数（満漢字）、丸印を挟んで章ごとの葉数。同本は渡部（1932：4）に著録されている。

現存の鈔本としてはさらに一種、王磊・劉雲（2018）において「辛卯本」と称される中国・中央民族大学図書館所蔵の四巻本がある。同本の巻一末尾には「光緒十七年八月鑲白旗滿洲二甲印房委筆貼式桂當阿恭錄奉送」との記載があり、これが光緒 17 年（1891）の鈔写にかかることを示している<sup>2</sup>。

以上の鈔本二種と刊本の巻・章・条を対照させると以下のようなになる。

---

<sup>1</sup> 民国間印本の封面には「庸言知旨」の左に「謝国楨敬題」とある。天理大学附属天理図書館蔵刊本（829.44-タ 93）には扉に「本書は民国 30 年前後の頃（大戦中）謝国楨が北京にて旧版木によりて上梓せるものなり、北京隆福寺文奎堂にて發賣（今西記）」（引用者注：「今西」は今西春秋氏と思われる）との記載があり、出版の経緯を物語っている。

<sup>2</sup> 同本は黄潤華・屈六生（1991：30）に著録され、「光緒十七年（1891）抄本；満漢合璧；四巻四冊；22×11.5cm」と記されている。

表 『庸言知旨』 諸版本の対照

五卷本（鈔本）			四卷本（鈔本）			二卷本（刊本）		
卷	章	条（通番号）	卷	章	条（通番号）	卷	章	条（通番号）
一	一	14 (1-14)	一	一	14 (1-14)	一	一	14 (1-14)
	二	22 (15-36)		二	22 (15-36)		二	22 (15-36)
	三	23 (37-59)*		三	22 (37-58)		三	22 (37-58)
	四	22 (60-81)		四	22 (59-80)		四	22 (59-80)
二	五	22 (82-103)	二	五	22 (81-102)	一	——	
	六	20 (104-123)		六	20 (103-122)		——	
	七	21 (124-144)		七	21 (123-143)		——	
	八	19 (145-163)		八	19 (144-162)		——	
三	九	20 (164-183)	三	九	20 (163-182)	一	五	20 (81-100)
	十	20 (184-203)		十	20 (183-202)		六	16 (101-116)**
	十一	21 (204-224)		十一	21 (203-223)	二	七	21 (117-137)
	十二	20 (225-244)		十二	20 (224-243)		八	24 (138-161)
四	十三	20 (245-264)	四	十三	20 (244-263)	二	九	20 (162-181)
	十四	19 (265-283)		十四	19 (264-282)		十	19 (182-200)
	十五	20 (284-303)		十五	21 (283-303)		十一	20 (201-220)
	十六	22 (304-325)		十六	22 (304-325)		十二	22 (221-242)
五	清語元音			——			——	

\* 五卷本の第 59 条は四卷本第十五章の第 290 条にあたり、二卷本ではこれを欠く。

\*\* 五卷本・四卷本の末尾 4 条分は二卷本第八章の第 158-161 条にあたる。

上表によると、五卷本及び四卷本の巻二にあたる部分を刊本では欠いており、また五卷本巻五の「清語元音」は四卷本及び刊本に存在しない。全体としての条の総数は、五卷本・四卷本が 325 条であるのに対し、刊本では 242 条となる。著者宜興が序において「凡三百餘則編為一帙」と言い、「以清語元音一卷附而綴之」と記す以上、五卷本が最も『庸言知旨』の本来の姿に近いことは明らかである。二種の鈔本における序文末尾の記載が「嘉慶歲次壬戌仲春宗室桂圃宜興序」であるのに対し、刊本にはそれに加えて「嘉慶歲次己卯初夏芸圃查清阿刊訂」とあり、查清阿の行った「訂」とは全体の簡略化と二巻への再編成であったことが推定される。

王磊・劉雲（2018）の刊行によって『庸言知旨』利用の便は飛躍的に高まったが、同書に基づく満洲語及び清代北京語の研究は、原本に最も近い形のテキストによって進められることが望ましいのは言うまでもない。今後の研究の基礎を形作ることを目的として、この校注テキストを公開する。

## 参考文献

- 王磊・劉雲（2018）『庸言知旨』（早期北京話珍本典籍校釈与研究・早期北京和珍稀文献集成・清代滿漢合璧文献萃編），北京：北京大学出版社。
- 太田辰夫（1951）「清代北京語語法研究の資料について」、『神戸外大論叢』2（1）：13-30。
- 河内良弘・趙弘（1985）「天理図書館蔵滿文書籍目録」、『ビブリア』84：156-184。
- 黄潤華・屈六生（1991）『全国滿文図書資料聯合目録』，北京：書目文献出版社。
- 宋冰（2013）「滿漢合璧《庸言知旨》作者宜興小考」、『滿語研究』2013（2）：44-47。
- 寺村政男（1994）「清代北京語資料彙集・“庸言知旨”（その1）」、『外国語学会誌』23。
- 寺村政男（2009-2012）「『滿漢合璧庸言知旨』の研究（その1～4）」、『水門』21：47-59；22：76-90；23：23-35；24：28-41。
- 渡部薫太郎（1932）『増訂滿洲語圖書目録』，大阪：大阪東洋學會。
- Möllendorff, P. G. von (1892) *A Manchu Grammar, with Analyzed Text*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

## 凡 例

- ・ 本稿は、五卷本『庸言知旨』の満洲文字をローマ字に転写するとともに、日本語で逐語訳を付し、あわせて対訳の中国語を翻刻したものである。
- ・ 使用するテキストは以下の通りである。カッコ内は略称：
  - (a) 大阪大学総合図書館蔵鈔本・五卷五冊〔五卷本〕
  - (b) 清嘉慶24年（1819）刊民国間印本・二卷二冊〔刊本〕
  - (c) 中央民族大学図書館蔵光緒17年（1891）鈔本・四卷四冊〔辛卯本〕
- ・ 以下では五卷本を底本とし、刊本及び辛卯本との異同を注記する。辛卯本では朱筆あるいは紙の貼付により原本の誤字脱字に対して訂正を加えており、本稿では訂正後のテキストに従う。
- ・ 中国語文のまとまり及び満洲語文の句点（これを「。」で表す）ごとに改行する。両者がずれる場合は中国語文のまとまりを優先する。

- ・ 冒頭に「章番号—条番号—句番号」を掲げ（章番号において序は0、目録は0番台をもって表す）、満洲語文のローマ字転写、満洲語文の逐語訳、中国語文の翻字の順に示す。中国語文末尾の（ ）内にはその部分の出処を「巻／章・葉・表裏・行」の順で記す。
- ・ 満洲文字の転写は Möllendorff（1892）の方式による。
- ・ 漢字は原則として原文のままの字体を用いるが、一部の異体字・俗字は通用の字体に改めた。

- an i gisun de amtan be sara bithe. jai debtelin.  
 日常の言葉に旨を知る書 第二巻  
 庸言知旨 卷二 (二/目 1a1)
- 05 sunjaci fiyelen i šošohon.  
 第五章の目録  
 第五章目録 (二/目 1a2) <sup>1</sup>
- 05-1 malhūšame hibcalara sisame sabarara saligan.  
 儉約して 節約する 撒き 散らす 見込み  
 儉省撒花的拿手 (二/目 1a3)
- 05-2 majige kemneme baitalaci.  
 少し 節約して 使えば  
 畧儉些用 (二/目 1a4)
- 05-3 sini teile.  
 君 だけ  
 獨你 (二/目 1a5)
- 05-4 si serengge boigon naha jafara niyalma.  
 君 というもの 家 産 握る 人  
 你是當家立紀的人 (二/目 1a6)
- 05-5 hūlhitu.  
 暗愚者  
 渾蟲 (二/目 1a7)
- 05-6 si cananggi wangga inenggi i onggolo gurimbi se nakū.  
 君 先日 望 日 の 前に 移る と言う や否や  
 你前日説望前就搬 (二/目 1a8)
- 05-7 akū bi gurime esi gurici.  
 違う 私 移るなら 当然 移るとも  
 不是哦我搬自然是搬 (二/目 1b1)
- 05-8 ere gūnin inu uru.  
 この 考え も 正しい  
 這想頭也是 (二/目 1b2)
- 05-9 ubade giyara moo be buyarame uncarangge akū.  
 ここに 切った 木 を 細々と 売る者 ない  
 這裡没有零賣劈柴的 (二/目 1b3)

---

<sup>1</sup> 刊本・辛卯本は目録部分を欠く。

- 05-10 koika i hūda ja.  
草煉瓦 の 値段 安い  
埤子雖賤 (二/目 1b4)
- 05-11 ere funcehe hontoho feise i farsi be.  
この 残った 半分の 煉瓦 の 塊 を  
把這個剩下的半頭磚 (二/目 1b5)
- 05-12 wesihun boo ai ocibe nikedeme sekjingge.  
貴い 家 どう あっても 何とか 暮らせる  
貴府憑怎麼還儂着過得 (二/目 1b6)
- 05-13 banjire boo.  
暮す 家  
過日子的人家 (二/目 1b7)
- 05-14 ceni taitai ini baru.  
彼等の 婦人 彼に 向って  
他們太太向他説 (二/目 1b8)
- 05-15 asihiyaha giriha jukten biha be.  
削って 切った 祭 肉片 を  
刀前刀後的碎塊肉 (二/目 1b9)
- 05-16 banjire jalin.  
暮す ために  
為生計 (二/目 1b10)
- 05-17 sikse afabuha sijigiyan be.  
昨日 渡した 長衣 を  
昨日交給他的袍子 (二/目 2a1)
- 05-18 niyalma oci.  
人 ならば  
論為人 (二/目 2a2)
- 05-19 dade isheliyen ajigen boode šoyome bukdame.  
始め 狭く 小さい 家で 縮まり 曲げて  
起根兒在精窄小的房子裡窩窩慙慙的 (二/目 2a3)
- 05-20 tesu falga be narašarakū ainaha.  
元の 所 を 愛さず どうした  
豈有不貪戀本處的 (二/目 2a4)

- 05-21 meni anggala komso.  
我々の 口 少ない  
我們的人口少 (二/目 2a5)
- 05-22 heolen cihai jaci ergule oho.  
怠惰で 恣に 甚だ 常軌 逸した  
懶散的太走了板兒了 (二/目 2a6)
- 06 ningguci fiyelen i šošohon.  
第六 章 の 目録  
第六章目録 (二/目 2a7)
- 06-1 cananggi nure tebufi.  
先日 酒 造り  
前日做了酒 (二/目 2b1)
- 06-2 niyanci hiyan tebufi feshen efen doboho ci.  
安春 香 置いて 蒸籠 菓子 供えて から  
自從點上香供了撒糕起 (二/目 2b2)
- 06-3 silda yali. halba tunggen be.  
頸 肉 肩甲骨 胸 を  
脖圈兒肉哈爾琶胸叉兒 (二/目 2b3)
- 06-4 ko. absi tarhūn.  
おお 何と 太っている  
畧好肥 (二/目 2b4)
- 06-5 oyo gaiha bicibe.  
祭肉 敬天した けれども  
供尖肉雖已拿完 (二/目 2b5)
- 06-6 niyalma emu dobori amgame ujihe manggi.  
人 一 晩 寝て 養った 後で  
人息養一夜 (二/目 2b6)
- 06-7 muse cimari tere age be tuwaname.  
我々 明日 あの 兄貴 に 会いに行って  
咱們明日瞧那個阿哥去 (二/目 2b7)
- 06-8 jaha i hongko de iliha niyalma.  
刀船 の 船首 に 立った 人  
舢船頭上立着個人 (二/目 2b8)
- 06-9 jahūdai be šurume kakū i hanci nikenefi.  
船 に 棹差して 水門 の 付近に 近づき



- 把船撐到開口根前 (二/目 2b9)
- 06-10 alin i dulimbai hacingga moo.  
 山 の 中 の 各種 の 木  
 山裏各樣的樹木 (二/目 2b10)
- 06-11 ainahabi. emdubei gehu gehuleme.  
 どうした ひたすら こくり こくりと  
 怎麼樣了儘只一銃一銃的冲頓兒 (二/目 3a1)
- 06-12 age tere berhe be ume ilibure.  
 兄貴 その 駒 を 決して 立てるな  
 阿哥別立那個馬兒 (二/目 3a2)
- 06-13 si dube deri ilhū ficambiheo.  
 君 端 から ずっと 吹いていたか  
 你打堵兒上直吹呢麼 (二/目 3a3)
- 06-14 geren jing torhome ilicame.  
 人々 ちょうど 輪になり 立って  
 衆人正團團站着 (二/目 3a4)
- 06-15 ye se uttu efimbio.  
 旦那 達 この様に 遊ぶか  
 爺們這們宗頑法兒嗎 (二/目 3a5)
- 06-16 jahūdai tefi sargašara de.  
 船 乗って 遊樂する 時  
 坐着船逛 (二/目 3a6)
- 06-17 jing dalbade emu jaha selbime.  
 ちょうど 傍らに 一艘 刀船 漕いで  
 正有滋有味的 (二/目 3a7)
- 06-18 bi tubade isinaci.  
 私 そこに 着くと  
 趕我到那裡去 (二/目 3a8)
- 06-19 ula i julergi tere fetheku baitalara jahūdai.  
 江 の 南の その 櫓 使う 船  
 江南的那個櫓船 (二/目 3a9)
- 06-20 si bi jeke yadaha teisu teisu yoha.  
 君 私 勝 手に それ ぞれ 行った  
 大家各自顧各兒 (二/目 3a10)

- 07        nadaci fiyelen i šošohon.  
           第七章の目録  
           第七章目録（二/目 3b1）
- 07-1      gemun hecen de ofi.  
           京城でなので  
           在京城裡（二/目 3b2）
- 07-2      julergi golo i ton i sukdu.  
           南の省の節の氣  
           南省的節氣（二/目 3b3）
- 07-3      aga sirke dabanaha.  
           雨 続き 過ぎだ  
           雨連霽的太過了（二/目 3b4）
- 07-4      bi duka neihe erin de.  
           私 門 開けた 時に  
           我開門時（二/目 3b5）
- 07-5      uba sebderi noho.  
           ここ 日陰 ばかり  
           這里竟是陰涼兒（二/目 3b6）
- 07-6      tere hūntahan be ganaci.  
           その 盃 を 取りに行くと  
           取那個鍾子去時（二/目 3b7）
- 07-7      ere udu inenggi beiguwen.  
           この 何 日か 寒い  
           這幾日冷（二/目 4a1）
- 07-8      šan yaribume nimeme.  
           耳 凍えて 痛み  
           因為耳朵凍的生疼（二/目 4a2）
- 07-9      mini ere šabtungga mahala be.  
           私の この 耳隠し 帽 を  
           我的這個臥兔兒帽子（二/目 4a3）
- 07-10     jakan bi edun i šasišame hūjire asuki be donjifi.  
           先頃 私 風 が 吹き ざわめく 音 を 聞いて  
           剛纔我聽見刮風吼的聲氣（二/目 4a4）
- 07-11     ere ucuri dobori majige golmin oho.  
           この 頃 夜 少し 長くなった

- 這一向夜畧長些了 (二/目 4a5)
- 07-12 **nimaraha be baime muterakū oho turgunde.**  
雪が降った 餌 得ること できなくなった ために  
因為下雪了打不着食了 (二/目 4a6)
- 07-13 **tuba galju juhe canggi.**  
そこ 滑る 氷 ばかり  
那純是明氷 (二/目 4a7)
- 07-14 **bi daci sun oromu be jetere de amuran.**  
私 元々 乳 乳皮 を 食べるのを 好む  
我自來好喫奶了奶皮子 (二/目 4a8)
- 07-15 **yaya usin de.**  
凡そ 田地 に  
凡各處地畝 (二/目 4a9)
- 07-16 **daci niyalma seri ofi.**  
元々 人 稀 なので  
起根因是人希少 (二/目 4a10)
- 07-17 **uba gobi bicibe.**  
ここ 砂漠 だが  
這塊兒雖是郭壁 (二/目 4b1)
- 07-18 **meni hoton.**  
我々の 城  
我們的城 (二/目 4b2)
- 07-19 **ishunde tookabume gūdu gada sehei.**  
互いに 引き留めて べちや くちや 言ったまま  
大家混着嘮間話兒 (二/目 4b3)
- 07-20 **jakan sihin i fejile.**  
先頃 軒 の 下で  
剛纔房簷底下 (二/目 4b4)
- 08 **jakūci fiyelen i šošohon.**  
第八 章 の 目録  
第八章目録 (二/目 4b5)
- 08-1 **niyalmai omire jeterengge.**  
人が 飲み 食べること  
人喫喝 (二/目 4b6)

- 08-2    **booha i dolo.**  
料理の内  
菜肴内 (二/目 4b7)
- 08-3    **niyalma aika angga hefeli i jalin gūnin kiceci.**  
人もしも口腹のために心努めれば  
人要為口腹用心 (二/目 5a1)
- 08-4    **hukšeri belei buda.**  
老米の飯  
老米飯 (二/目 5a2)
- 08-5    **bi daci katang seme mangga de amuran.**  
私元々かちかちと硬いのを好む  
我當日好喫硬東西 (二/目 5a3)
- 08-6    **we terebe omire fulu.**  
誰彼を飲むこと多い  
誰說他的酒量大 (二/目 5a4)
- 08-7    **musei jetere be.**  
我々が食べるのを  
咱們喫的 (二/目 5a5)
- 08-8    **daci jeku de fiyancihyan.**  
元々食に細い  
起根兒飯食上雖有限 (二/目 5a6)
- 08-9    **tukiyehe fila.**  
上げた皿  
擺上來的碟子 (二/目 5a7)
- 08-10    **niyalma nure omiki seci.**  
人酒飲みたいと思えば  
人要喝酒 (二/目 5a8)
- 08-11    **cimarilame ilifi.**  
夜が明けて起きて  
一清早起來 (二/目 5a9)
- 08-12    **ufa ehe.**  
粉悪い  
麵不好 (二/目 5a10)
- 08-13    **coko i humsuhun i sukū oci.**  
鶏の砂肝の皮は

- 鷄肫皮 (二/目 5b1)
- 08-14 jekengge dabanahao.  
食べたもの 多すぎたか  
喫的不知道是多了 (二/目 5b2)
- 08-15 balai ulha ujime warangge.  
妄りに 家畜 飼って 殺すこと  
胡亂殺牲口 (二/目 5b3)
- 08-16 belei nijihe suwaliyame buda arafi.  
米の 砕いたもの 混ぜて 飯 作り  
帶着碎米心子做了飯 (二/目 5b4)
- 08-17 i emu eihen kutulefi.  
彼 一匹 驢馬 牽いて  
他牽着一個驢子 (二/目 5b5)
- 08-18 niyalma be kokirafi beyede tusa arara be.  
人 を 損ない 自身に 利益 なすのを  
損人利己 (二/目 5b6)
- 08-19 niyengniyeri i lidu suye.  
春 の 緑豆 汁  
春天的豆汁兒 (二/目 5b7)

(待続)